

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 32 回 「涙の分析」～本当の経営分析とは...

企業を客観的に評価する方法の一つに「経営分析」という手法がある。今月 3月 の I K G 後継者講座のテーマで、受講者は電卓片手に、お勉強の真っ最中、慣れていない人には、中々分かり難いかも知れない。

経営分析とは何ぞや? ...ということに関しては、正に I K G 後継者講座を受講していただきたいと P R しておき、興味のある方は、本屋に行けば嫌になるほどこの種の書籍は売られているゆえ、是非ご覧頂きたい。要は、損益計算書、貸借対照表、キャッシュフロー計算書等の財務諸表を分析して、その企業の経営上の問題点を発見し、原因を分析、改善の方向性を追及していく問題解決のための技法である。

経営管理者自らはもちろん、株主、金融機関などの利害関係者、アナリストや研究者などが好んで利用することが多い。特に中小企業診断士や商工会、商工会議所の経営指導員、市町村・都道府県の経営指導担当官、税務署の国税調査官、信用保証協会や国金 国民生活金融公庫 などの審査担当者などは、必ずと言っていいほど、常用する手法である。

具体的には、色々な数値を足したり引いたり、割ったりかけたりする訳で、やればやるほど、細かくなりきりが無い。が、この手の手法は「オタクキー」と言われる「好き者」がいる。重箱の隅を突つくほどの詳細な数値を出し、結局、「涙は水分がほとんどで若干の塩分と...^{うんぬん}云々。」と言う分厚い報告書を作成し、自己満足の世界で終わっている。

一番肝心なことは、涙がどんな成分で出来ているかではなく、その涙は、何で出たのか? その原因を追究するのが経営である。嬉しい時出る「嬉し^{うれし}涙」、感動ゆえに感^{かん}極^{きわ}ま^{まって}って落ちる涙、悔しくって思わずこぼす涙、興奮状態から発する涙、大欠伸から零れ落ちる涙、一言に「涙」と言えども、いやいや、「涙」は色々である。

涙は人間の感情表現の極みである。それを見極めるのが「経営分析」であり、「涙は水分がほとんどで若干の塩分と...^{うんぬん}云々」では決してないはずである。

目先の数値ばかりを追いかけて、実は大元^{おおもと}の真実を見逃してしまう。「木を見て森を見ず」とは、正にこのことであり、この経営診断報告をベースにその後の対策を構築するとしたら、想像するに恐ろしいこととなる。我々は常に、本当の意味での「涙の分析」に心掛けなければいけない。普段の仕事の「慣れ」と、逆に異常なる「^{きあ}い^い」は、往々にして「涙の分析」的^{あやまち}過ちを犯しやすい。

真の問題点は何か? 何をどう解決すべきなのか? そんな、基本的大命題を、真正面から受け取っていく姿勢、経営分析を活用する第一条件だと言えるのである。